

# 子供ぬせ話し、思い辛い

夏ごろから気持ちを打ち明け始めた女兒(左)に、柳田さんは、「簡単に『気持ちがわかる』なんて言ってほしくないと思うから、話を聞いてあげたい」と話す(8月、東京都内で)



## 離婚家庭 支援進まず

### きこしむ 親子 ⑦

女兒は別れて暮らす父と時々会う。うれしい反面、家族の様子を事細かに聞かれ、「一緒に暮らしたい」などと言われると、困ってしまう。帰宅後、母には「楽しかったよ」としか伝えられない。離婚してからようやく笑顔を見せるようになった母を困らせたくない。その一心で、思いを胸に閉

じ込めていた。

そんなとき、出会ったのが柳田さんだ。親の離婚を経験したスタッフらでつくる民間団体「アンファンパレット」(東京)から派遣されてきた。柳田さんも親の離婚を経験している。

「お姉ちゃんができたみたい。何でも話せて、気持ちがあすっきりする」。女兒は笑顔を見せた。

「日本は離婚に対する偏見が強く、子どもへの支援が進んでいない」。離婚家

**児童訪問援助員** 厚生労働省の「ひとり親家庭生活支援事業」で、一人親家庭に派遣される大学生などのボランティア。昨年度、派遣されたのは全国で延べ900件にとどまる。

庭の支援を研究する小田切紀子・東京国際大教授(臨床心理学)はそう話す。

親が離婚した子どもは毎年20万人を超える。4人に1人が親との別れを経験する時代。国は、離婚で精神的に不安定になっている子どもを支えるため、児童訪問援助員を派遣しているが、こうした取り組みは民間も含めまだ少ない。

米国オレゴン州で研究する小田切教授によると、同州では、離婚の際、子どもへの影響などを学ぶプログラムの受講が州法で義務づけられている。州から委託された民間団体のカウンセラーが子どもの悩みを聞くプログラムもある。

小田切教授は「離婚家庭の子どもには精神的にも経済的にも特別なサポートが必要。離婚後の子育てを見据えた制度を整えるべきだ」と話す。

「あのときは、どん底だった」。大阪府内に住む高校1年生の男子生徒(15)は、中学に入学するとすぐに、母と弟と3人で家を出た。父の度重なる暴言に耐えきれなかった。約1週間、サウナなどを転々とし、今のアパートに落ち着いた。

その年の秋、両親が離婚した。「なんで俺は普通じゃないんだ」。精神的に追い詰められ、週の半分も中学に行けなくなった。「よく死ななかったと思う」翌年の冬、母の勧めで、

一人親家庭の子どもを支援するNPO法人「あつとすくーる」が運営する学習塾に入った。スタッフは一人親家庭で育った若者たち。たわいのない会話を交わすうちに、信頼できる先生に自分のことを話せるようになった。勉強もやる気が出てきた。二度と会いたくないと思っていた父との面会も、苦痛ではなくなった。「先生たちに出会って、こんな大人になろう、自分の人生も悪くないと思えるようになった。そういう出会いがあれば、きっと乗り越えていける」(おわり)

この連載は小坂佳子、小林篤子、稲垣信、矢子奈穂が担当しました。

◇ 意見・感想をお寄せ下さい。あて先は右ページ下段「社会面に情報を」にあります。

「夜、お母さんとお父さんが大声でけんかをしていて、布団をかぶっても眠れなかったんだ……」  
今年7月、自宅の机に向かっていた小学6年の女兒(11)がぼつりぼつりと語り始めた。「うんうん」「つらかったね」。家庭教師の大学生柳田郁乃さん(22)が相づちを打つ。4月から週1回勉強を教えているが、女兒が「辛い思い出を吐露したのは、初めてだった」。

女兒の両親は3年前に離婚。今は東京都内で、母(39)と重い障害を持つ妹(6)と3人で暮らす。母は寝たきりの妹に付きっきりで、女兒と過ごす時間はなかなか取れない。